

ジャワハルラル・ネルーの勝利と敗北

——あたらしいネルー伝によせて——

山 口 博 一*

今日の大部分の発展途上国が直面する切実な問題は、強権的な政治にたよらずにいかにして経済成長を実現するか、いいかえれば、民主主義と経済発展をどのようにむすびつけるか、ということである。このような観点に立つとき、独立後17年にわたって首相をつとめたインドの政治家ジャワハルラル・ネルー（1889—1964、独立は1947年）の生涯はまことに示唆にみちたものである。かれは、独立運動にたずさわった約30年間を通じヒンドゥー教徒の多数派とムスリム（回教徒）の少数派のあいだに融和をもたらそうとしたが、英領インドはインドとパキスタンに分割された形でしか独立することが出来なかった。これが普通に分離独立といわれるものである。かれは、インド独立運動の最大の指導者ガンディ（1869—1948）の反英非協力、不服従運動によって育てられたのだが、独立以前から社会主義に近付き、しばしば小作農民などの要求をとり上げようとした。しかし、かれが他界した1964年のインドでは、政治的には民主主義が一応は出来上っていたが、社会経済的な変革はまだ本格的な日程には上っていないかった。また、ネルーは、1920年代から、インドと中国を中心とした新生アジアの構想をえがいていた。しかし、予期しなかったパキスタンの分離、同国との対立の常態化に加えて、中国との関係も50年代後半からは冷却し、62年にはついに破局をむかえることになった。

ネルーの生涯にはこのように光と影とが交錯している。この光と影を立入って検討するなら、民主主義と経済発展をむすびつけるということが今日の途上諸国においてどのようにつく求められ、どのように大きな困難を背負う課題であるかがある程度は見当がつくであろう。すこし前に完結したゴープールの3巻のネルー伝(S. Gopal, *Jawaharlal Nehru; A Biography*, Jonathan Cape, Vo.1, 1975, Vol.2, 1979, Vol.3, 1984)は、視角のするどさや利用した資料の豊富なことから質量ともにこれまでの多くのネルーの伝記の最右翼に位置するものと考えることが出来る（本文946ページ）。以下では、このゴープールのネルー伝を紹介しながら、ネルーがいかに成

* やまぐち ひろいち アジア経済研究所地域研究部(前)部長

功しどこで失敗したかを、ヒンドゥーとスリムの関係、ガンディ的指導と民衆の関係、パキスタンや中国など近隣諸国との関係、の三点からみてゆこう。

1 ヒンドゥーとムスリム

ネルーの家系はカシミール地方のヒンドゥのブラーマンの出である。実際にジャワハルラールがカシミールで生れ育ったのではない。高名な弁護士だった父モティラールの生地はデリーであり、ジャワハルラールの生地はカシミールからさらにへだたったアラハバードである。母の出身地もラホールであった。しかし、新疆地方や中央アジアに近く、住民の大部分がムスリムであるカシミールの特質はネルー家にもかなりの影響をあたえている。モティラールが得意としたのは英語の他にはアラビア語、ペルシャ語、ウルドゥ語であり、その点ではかれはヒンドゥ的というよりもムスリム的な存在であった。また、かれの執事はムスリムであった。さらに、モティラールはヒンドゥとしてもあまり厳格ではなかった。かれの時代には海外に渡航することはまだけがれを意味していたが、モティラールは1899年に海外渡航をしたにもかかわらずきよめをうけることを拒否したので自分の所属するカーストから除名されている。カシミール・ブラーマンの基準からしても正統派ではなかったということである。

すべてこうしたことが若きジャワハルラールに影響をあたえなかった筈はない。当然のことにかれはヒンドゥとムスリムの関係を重視した。かれがキラファト問題（オスマントルコのカリフ制廃止反対）をひとつのきっかけとしてガンディの非協力運動に加ったのも、それがヒンドゥとムスリムの共同の要求だったからだろう。そのために逮捕されたかれは、普通にはムスリムの言語とされているウルドゥ語を獄中で勉強している。ちなみに1937年の『言語問題』という論文で、かれは右書きのウルドゥ文字と左書きのデーワナーガリ文字を併用したヒンドスターニー語が将来のインドの国語となることを主張している。実際には、パキスタンの分離のために、独立インドはデーワナーガリ文字のみによるヒンディ語を連邦の公用語として採択した。それ以後、ネルーの言語問題への最大の関心はウルドゥ語の地位の確保にあった。

22年にガンディが非協力運動を中止すると、ヒンドゥとムスリムの関係はにわかに悪化の一途をたどる。本書によれば、1900年から22年まで16件にすぎなかった宗教暴動が23年から26年にかけて72件に急増したというが、本書はこの新しい傾向の分析にはほとんど貢献はしていない。ネルーが23年4月から25年4月までアラハバードの市長であり、26年3月から27年暮近くまで渡欧していたので、この問題は直接かれの伝記とかかわりないということであろう。ネルー自身の反応については、かれは経済問題の解決が宗教対立を解決するとしてこのような傾向を重視していなかった、といっている。

やがてガンディ指導下の国民会議派が30年から不服従運動を開始すると、会議派内のムスリム指導者のほとんどはこの運動がヒンドゥーとムスリムの対立を激化させるとして反対した。その中にはネルーに近い人も多い。有名な「塩の行進」にはじまる不服従運動がなぜ宗教対立をかきたてる形でしかなしえなかったかは、これまであまり説得的な研究がなされていない。本書もその点では例外ではない。しかし本書は、この運動の成果ともいふべきイギリスの1935年インド政府法にもとづく州議会選挙の結果について、ネルーの不注意な行動のため UP（連合州）での会議派と回教徒連盟の連立交渉が失敗し、それが連盟のイスラム主義的行動をあおりパキスタン分離への道をひらいた、とする「神話」を否定し、連立交渉の最中すでに回教徒連盟はムスリム共通の利害ということを前面におし出していたと論じている。

2 ガンディ的指導と民衆

不服従運動の開始の時の会議派の議長はネルー自身であった。かれは、29年末にラホールで行った就任演説で、「私は社会主義者であり共和主義者である」といっている。かれは26年から27年にかけてのヨーロッパ滞在中にかなり社会主義に接近した。27年11月には父とともにソ連を訪問しているが、わずか数日の滞在であるにもかかわらず、ソ連の農業発展、監獄改革、文盲退治、男女同権、民族問題解決、貧富差解消などに感銘をうけている。かれはまた会議派の綱領に経済政策をもち込んだ最初の人である。なお共和主義者というのは、インドはカナダやオーストラリアなみの自治領(Dominion)として満足すべきではなく、英帝国や英連邦と絶縁して共和国として独立すべきである、ということである。結果的にはインドは47年に自治領として独立し、50年に共和国となったが英連邦にはとどまって現在にいたっている。

ネルーはこのように一方では左派、急進派であったが、他方でかれは最後まで師のガンディからはなれることが出来ず、広汎な学生や知識人層を保守的な会議派指導部につなぎとめる役割を果たした。不服従運動で投獄されていた一時期に一度だけ「短かいあいだ目かくしがとれた」(Vol. 1, p. 177) ことがあったが、結局はガンディの傘下をはなれることは出来なかった。

この時期ガンディとネルーの差を端的にあらわすものは UP の小作問題に対する両者の取組み方の差であろう。UP では27年から不作が多く、これに加えて大恐慌のため農産物価格が下落の一途をたどっていたが、小作料のうちの地主の取得部分は政府への納税額をはるかに上廻る規模で増えており、地主による小作人追立ても広汎に行なわれていた。しかしガンディは時として納税停止を承認することはあっても小作料の支払停止にゴーサインを出すことはほとんどなかった。ネルーも基本的にはガンディの線にとどまりはしたが、30年、31年に小作料不払いを農民に指令し、どちらの

場合にも逮捕されている。政府側が、UPの6～700万の小作農民が動き出したら破局であると考え、ネルーを危険視したのも当然である。

このようにネルーには不服従運動の開始以来ガンディとの関係について再考慮すべき機会が何回となくおとずれたが、これらはいずれも見送られた。他方のガンディはネルーをその影響下につなぎとめることについては自信満々で、42年1月にはついにネルーを自分の後継者とよび、私がいなくなった後はかれは私の言葉を話すだろう、とまでいっている。

3 中国・パキスタンとの関係

本書全3巻のうち最初の巻は独立までを扱い、のこりの2巻は独立後にあてられている。後2巻は合せて27章からなるが、そのうち13章までが外交に関するものである。これは戦後世界の国際関係においてネルーが、およびかれを通じてインドが果たした役割の大きさを物語るとともに、インドにとっての対パキスタン関係（カシミール問題を含む）、対中国関係の困難さをしめしてもいるのである。

ネルーは、かれが唯一の会議派代表として出席した27年のブラッセルでの反植民地抑圧反帝国主義国際会議で、中国代表团との共同声明を起草して以来、長いあいだインドと中国の友好を核としたアジアの将来を考えてきた。第二次大戦が開始された時、かれは中国訪問の途中であったが、日程を変更して急ぎ帰国した。もしも開戦がおくれていたならかれは実際よりも十数年早く中国共産党指導者たちと接触していただろうと思われる。そのことは中印関係の将来にあるいは大きな影響をおよぼしたかも知れない。革命後の中国でインドの外交政策が高い評価をうけるようになったのはその対日講和条約にたいする姿勢によってである。54年に周恩来がジュネーブ会談の帰途インドを訪問し、55年のアジア・アフリカ会議（バンドン）でネルーが周をアジア・アフリカ諸国に紹介した時には、中国はまさしくインドの助力を必要としていたといえるであろう。これは、独立当初のネルー政府を第二の蔣介石政府と考えていたソ連との関係改善の時期でもあった。

しかし、独立運動の時代にはほとんど予想されなかったパキスタンの創設、およびパキスタン軍のカシミールへの侵入によって、ネルーの外交は最初から大きな制約をうける。かれは一時は住民投票を行ってカシミールをパキスタンとの間で分割することを考えていたが、まもなくパキスタンの西側軍事同盟への加入、それに伴うカシミールへの西側軍事基地設置の可能性がつよくなったため、分割案は棚上げされ、今日にいたるまでカシミール問題は両国間の懸案となっている。これに加えて、中国は58年11月からそれまでの立場をかえて中印国境は未確定であるとの見解を表明し、62年10月について大きな兵力をもって東部と西部の国境地域でインドを攻撃したため、ネ

ルーは20年代以来の中印提携の構想をすてることを余儀なくされるにいたった。かれの外交政策の大きな転換であったといわざるをえない。

本書によれば中国が侵攻を決定したのは62年の5～6月であった（Vol.3, p.212）。その背景の一部には明らかにチベットでの反乱とダライ・ラマのインド亡命があった。昨今またチベットでの反乱を耳にするが、難航している中印間の国境交渉がやがては平和的に終結することをのぞみたい。